



美術史から、拡がる視点

Artist

高橋 翔 TAKAHASHI Sho

博士後期課程芸術専攻

芸術学領域 1 年

Writer

古谷 美也子 FURUYA Miyako

芸術専門学群芸術学専攻

美術史コース 3 年



12 月、筑波大学において日台三大学大学院生美術史研究交流会が行われた。筑波大学と台湾の大学の大学院で、美術史研究に取り組むに学生による口頭発表会である。高橋さんはこの日、最初の発表者としてマイクに向かった。この交流会では、質疑応答も含めてすべて発表は英語で行う。会場にいる全員が静かに耳を傾ける中、高橋さんはスクリーンに画像を映しながら、落ち着いた口調で古代ギリシアの彫刻について説明を始めた。



日台三大学大学院美術史研究交流会での発表の様子（2014 年 12 月）

はじめは

高橋さんは現在、筑波大学の大学院博士課程で古代ギリシア美術、主に彫刻について研究している。大学時代から数えるともう 7 年目になる。とはいえ、入学当初はまだはっきりとテーマが決まっていたわけではなかった。きっかけは、大学 1 年の時に参加した美術史の研究会。もともとミイラなどのエジプト美術が好きだった高橋さんは、そこで行われた研究発表で、見慣れていた古代エジプト美術の文様とよく似たものが、古代ギリシアの陶器にも描かれていたことに驚く。「エジプトからギリシアへ、『もの』がどのように伝わりどのように受け入れられたのか、そこにとても興味を持ちました」それ以来、古代ギリシア美術を研究している。大学 4 年間の集大成である卒業論文のテーマは、「古代ギリシア・アルカイック彫像成立期におけるエジプト美術



発掘調査に参加したトロス遺跡全景（2014 年 8 月高橋さん撮影）

の影響—古代における美術と死生観に関する研究」。紀元前 6 世紀前後に多く作られた、クローソ像と呼ばれる裸体の男性彫像についての論文であった。「クローソ像の源流の一つとして、エジプトから伝播した可能性が挙げられています。国から国へ、地域から地域へ『もの』がどのように伝播していくのか、それは引き続き、大学院でも大きな研究テーマです」美術史は、時代やスタイル、そして関連する様々な分野との関わりなど、その領域は広い。その中に立つ高橋さんは、どのような視点を持っているのだろうか。

発掘調査に参加する

高橋さんは、一昨年と昨年の夏の二度にわたり、トルコでの遺跡の発掘調査に参加した。場所はトルコの南西部にあるトロス遺跡である。古くから交易の要所として栄え、現在でも多くの遺構が残っている。高橋さん達が発掘した現場は、1000 年以上前に建てられたキリスト教の聖堂の遺構である。「発掘は主に、コテを使って丁寧に表土を削っていき、石やレンガなどの遺物に当たったら、記録

のための写真を撮り、それから計測やスケッチをします。そのあとで、それがいつ、何のために使われたのかを考えていきます」。発掘の参加者は日本とトルコの両国からで、高橋さん以外ほとんどが考古学、歴史学の専門家であった。最初に参加した時、彼らのスキルや知識の豊富さには驚いたという。しかしそこで考えた。「発掘の目的はその遺構の編年を推察すること。自分がすべきことは、美術史の立場から、発掘されたものや場所に適切な付加価値を与えることではないか。歴史学は文献や文字から情報を読み取る。同じ様に、美術史は作品を扱う。文字ではなく形から、制作された時代や地域を判断するアプローチが美術史の視点に求められているのではないか」

高橋さんにとって今回の遺構は、研究している古代ギリシアとは 1000 年以上も時代が離れてはいるが、発掘に参加できたことはとても貴重な経験であった。発掘調査の方法論を学ぶ機会でもあり、他分野の研究者と話をすることで美術史以外の知識を吸収でき、自分自身の視野を広げることに也大いに役に立ったという。

実物を見る

今回の発掘に参加するにあたって、高橋さんにはもう一つ大きな目的があった。それは、研究の対象である古代ギリシア美術の実物を見ることである。これは長い間の念願であった。発掘期間の前後を利用して、トルコ国内だけではなく、ギリシャ、ドイツなどにある博物館や美術館、そして遺跡をできる限り見て回った。本や写真ではわからない実物の彫刻の大きさ、側面や背面を実際に自分自身の目で見ることで、作品の印象もこれまでとは変わり、新たな発見もあった。そして何よりも実物が持つ力のようなものを感じたという。さらに、その彫刻がもともと置かれていた遺跡を自分の足で歩いて調査することで、それらがどのように置かれ、どのような意味を持ち、古代の人達はどのように感じていたのかを推測した。作品の実物を見る、そして、作り出された当時の状況を考える。これらは美術史の研究でとても重要なのである。

日本に戻った高橋さんは、早速、調査した作品に関連する文献を読み、研究の土台を作る。そこから起こった問題意識を解決するためにまた読み、さらに仮説を立てるためにまた読む。ひとつ、またひとつ、論文や資料はまるでネットワークのように連なって、どんどん広がっていく。「一日にいったい何時間文献を読むのか」と高橋さんは笑って話す。しか



調査で訪れたギリシャ・サモス島のヘラ神域（2014 年 9 月高橋さん撮影）

し、こうして研究は一步一步進められるのである。

古代ギリシア美術を研究する

日本人として、西洋の美術を研究することとはどこまで可能なのだろうか。おそらく西洋美術史を学ぶ多くの人が、一度はそんな不安を持つことがあるのではないだろうか。高橋さんにもやはり、そういう時期はあったという。しかし高橋さんの場合、それは逆に自信となり、大いに研究の励みとなっている。

それは大学 4 年の時だった。あるシンポジウムに参加した際に、大英博物館のキュレーターと話をするという機会に恵まれた。彼は高橋さんに「古代ギリシア文化の流れを汲んでいない、ヨーロッパ以外の人間が、古代ギリシアについて考えることには意味がある」と言ってくれたそうだ。ちょうど卒業論文を執筆している時期であった。「自分の研究に意味を与えてもらった」と、高橋さんは振り返る。ギリシャから遠く離れたこの日本でギリシア美術を研究する意味。日本人だからこそ理解できることがあるのではないかと思えたのである。

高橋さんはこう考えている。「日本人はこれまで、仏教をはじめ様々な大陸からの文化を受け入れてきた。そのまま日本に根を下ろしたものもある。一方で、日本人がもともと持っている固有の文化や

思想の中で取捨選択されたものも多い。そういう日本人だからこそ、古代ギリシア美術に見られる他地域との伝播の可能性を研究する意味があるのではないか」

美術史家もアーティスト

高橋さんは、自分が学んできたことを、できるだけ発信していきたいと考えている。そんな風に自然に思えるのは、この筑波大学で美術史を学んできたおかげだろうか。

筑波大学の美術史コースは、絵画や彫刻、デザインなどの制作中心の学生と同じ芸術専門学群の中にある。入学した時から一緒に学んできた友人たちも、多くが制作系の学生だ。普段何気ない話をする時、彼らは当たり前のように、アーティストの立場から自分自身のことを語る。そんなとき高橋さんは、自分の研究について彼らと同じように語るという。「自分にとって、研究したことやそれをまとめた論文は作品だと思っています。美術について関心や問題意識を持って取り組む姿勢は、作品を制作するアーティストときっと同じはずです。彼らが作品を発表するように、自分も学んだことをどんどん発信していきたいです。論文を書いたり、海外の文献を日本語に訳したり、発表したりしながら、古代ギリシア美術の、特に彫刻の魅力をたくさん人に伝えたいです。将来、そういう仕事ができればと思っています」。高橋さんが思い描くのは、古代ギリシア美術を研究、発信する、いってみればアーティストとしての美術史家。きっとこれからも、美術史の視点でさまざまな可能性を拓いていくのだろう。

日台美術史交流会での発表を終え、少しホッとした表情の高橋さん。「台湾の方たちと交流して、古代ギリシアの彫刻について関心を持っていただけたなら、自分の中では、今日の発表は成功だと思っています」。高橋さんの作品は、こうして発信されていく。